

C. S. パースにおける反転クオリアと記号の恣意性について

和田 太洋（神戸大学大学院人文学研究科）

発表要旨：

「クオリア」は、現代の心の哲学を語る上で不可欠な概念になっている。それは、「所与のものが持つ認識可能な質的性質」(Lewis [1929] 121) であり、「純粹に主観的であるがゆえに、どのような誤謬の可能性にも晒されない」(同書) ものだとされる。こうした主観的クオリアと外界に関する知識の関係をめぐり、意識のあり方が外化された行動のみから捉えきれぬのか否かが問題になってきた。とりわけ、デイヴィッド・チャーマーズ (David Chalmers, 1966-) は、クオリア間の置換が振る舞いの差異として何ら現れないとする「反転クオリア」の思考実験を活用しながら、意識の物理現象への還元不可能性を強く主張しており、その妥当性は今なお論争の的となっている。

本発表で扱うのは、チャールズ・サンダース・パース (Charles Sanders Peirce, 1839-1914) における「反転クオリア」の議論である。現代の哲学へと繋がる文脈で「クオリア」という概念を初用したのがパースであることは先行研究 (Keeley [2017]) でもすでに知られているものの、彼が「反転クオリア」の思考実験にも言及していた事実は見落とされてきた。パースは、自身の記号の三分類 (アイコン・インデックス・シンボル) に基づき、慣習に依存する記号であるシンボルの物理的な性質に注目する限りではクオリアの反転が想定可能であることを認める。しかし、1866 年の講義録をはじめとするパースの記述を精査すると、類推関係をも含めた〈全面的な反転クオリア〉は想定不可能であるという結論が導かれる。

本発表の目的は、パースの記述を頼りに、限定的な意味合いでのクオリアの置換可能性を認めながらも、その全面的な反転の不可能性を主張する立場を提出し、意識をめぐる哲学的論争を記号論の側から検討することにある。パースの論述が示唆しているのは、振る舞いに反映されないクオリアの反転が想定可能だとする立場が、シンボルの持つ〈記号の恣意性〉という特性においてのみ成立する操作を、質的類似性 (類推関係) に基づくアイコンの記号関係にまで不当に拡張しているという可能性である。

参考文献

- [1] Chalmers, David J. (1996). *The Conscious Mind: In Search of a Fundamental Theory*. Oxford University Press.
- [2] Champagne, M. (2016). "Can Pragmatists Believe in Qualia? The Founder of Pragmatism Certainly Did..." *Cybernetics and Human Knowing*, 23 (2): 39-49.
- [3] Keeley, Brian L. (2017). "The Early History of the Quale and Its Relation to the Senses." In Sarah Robins, John Symons & Paco Calvo, *The Routledge Companion to Philosophy of Psychology*. Routledge.
- [4] Lewis, C. I. (1929). *Mind and the World Order*, Scribner's.
- [5] Peirce, Charles S. (1982-2009). *Writings of Charles S. Peirce: A Chronological Edition*, ed. Peirce Edition Project. Indiana University Press.